

前回部会（平成 23 年 6 月 7 日）における指摘事項及びその対応

番号	指 摘 事 項	対 応
1	<p>煙突高が高い場合には、ドップラーソーダーにより上層気象を調査する場合もある。これまでのごみ処理施設の環境影響評価の事例におけるドップラーソーダーの使用状況を整理して示してほしい。</p>	<p>本県における環境影響評価法または愛知県環境影響評価条例に基づく環境影響評価の事例における上層気象の調査方法は、別紙のとおりです。 これによると、4 事例とも、低層レーウィンゾンデを使用した調査が行われており、1 事例では特殊地形を考慮した拡散モデル構築のために行われた屋外拡散調査の中でドップラーソーダーを使用した調査も行われていました。</p>
2	<p>大気質の予測に用いるバックグラウンド濃度を適切に設定するためには、現在稼働し将来は稼働を停止する施設による影響を予測シミュレーションにより把握する意味はあると思うがどうか。</p>	<p>現在の環境濃度には、将来稼働を停止する施設の影響も含まれています。 本県で行われた環境影響評価の事例では、通常、現在の環境濃度をバックグラウンド濃度として設定し、安全側に立った予測評価を行っています。</p>
3	<p>環境影響評価に係る印刷物は、F S C 森林認証用紙等の生物多様性に配慮したものとしてほしい。</p>	<p>事業者を確認したところ、今後作成する環境影響評価準備書等の印刷物は、F S C 森林認証用紙等を使用するなど環境に配慮したものにするとのことでした。</p>
4	<p>廃棄物層の下には、砂質土層と粘土層が互層で分布しているので、掘削工事による地下水への影響を見るためには廃棄物層の下部の被圧地下水を調査する必要がある。 また、調査用井戸の設置に際しては、廃棄物層内の地下水が下部の砂礫層に浸透しないような施工法を採用することが必要である。</p>	<p>方法書 6 9 ページのボーリング調査結果によると、被圧地下水の帯水層は①地下 1 3 ～ 1 5 m の粘土層の上、②地下 2 1 ～ 2 3 m の粘土層の上の 2 層があると考えられます。 事業者を確認したところ、方法書 2 1 7 ページに示す被圧地下水の観測井戸は、廃棄物処理法に基づく地下水質調査を実施するために設けた観測井戸であり、②の帯水層の被圧地下水を調査するものとのことでした。 ご指摘のとおり、廃棄物層の下部の被圧地下水である①の帯水層の被圧地下水を調査するための観測井戸を設け、適切な予測及び評価を行う必要があると考えます。 また、調査等に際して、地下水汚染を防止するための十分な配慮を求めると考えます。</p>

ごみ処理施設の環境影響評価における上層気象調査の実施状況

番号	事業名	処理方式	調査方法	事業実施区域	処理能力	排ガス量 (湿りガス)	煙突高さ	事業地の標高
1	豊田市新清掃工場設置	熱分解ガス化溶融炉	地上1,000mまで50mごとに、パイロットバルーン法により風向・風速を、低層ゾンデ法により鉛直気温分布を調査	豊田市渡刈町	405トン/日	約126,000m ³ N/h	59m	約40m
2	岡崎市新一般廃棄物中間処理施設建設	ガス化溶融施設 (シャフト炉)	「高層気象観測指針」(平成7年3月気象庁)に基づく方法(低層レーウィンゾンデ)	岡崎市板田町	380トン/日	約140,000m ³ N/h	59m	約170m
3	刈谷知立環境組合ごみ焼却施設更新	ストーカ炉	地上1,500mまで50mごとに、低層ゾンデ法により風向、風速及び気温の鉛直分布を調査	刈谷市半城土町	291トン/日	約98,000m ³ N/h	59m	約10m
4	小牧岩倉衛生組合環境センターごみ処理施設更新	ガス化溶融施設 (シャフト炉)	・地上1,000mまで50mごとに、レーウィンゾンデにより風向、風速及び気温の鉛直分布を調査 ・トレーサーガスを使用した屋外拡散調査において、地上300mまでの風向、風速をドップラーソーダーにより密に調査	小牧市大字野口	197トン/日	約71,000m ³ N/h	59m	約80m